

わたしの京都

河野裕子

歌会について—京大会館（左京区）

歌誌「塔」の選者になったのは、一九九三（平成五）年だった。それまで、歌会に出たことは数えるほどしかなかったが、立场上、責任上、歌会に出ることになった。歌会の場所は京大会館である。月に一回の定例歌会の名称を「旧月歌会」という。例えば三月の例会は弥生歌会、

五月は皐月歌会、八月は葉月歌会というように陰暦の月の異名で呼ぶ。旧月歌会というのは実は正しくなく、陰暦歌会と呼ぶべきなのだが、いつのまにかこの呼称が定着してしまい、今更変えようもなくなってしまった。

京大会館には、会合用の小部屋がいくつもあるが、わたしたちが使ったのは三、四十人ほど収容可能な部屋で、机や椅子を矩形に配置してお互いの顔が見えるように工夫した。

これは、短歌や俳句が座の文芸といわれるように、車座になって歌会や句会をしたことにすこしでも近づきたかったからである。

月々の例会に出るようになって、歌会というもの、かくも刺激的でスリリングで面白いものかと思いつくのに時間はかからなかった。歌会のある部屋のドアを押すときは緊張して胸がドキドキする。これは何年たっても変わらない。新人の顔があると嬉しくなる。四国や伊勢からの遠方組の人たちは、どれだけの時間をかけてやって来るのだろうと感心する。

歌会をやっている部屋を、短歌にまったく関係の無い人が覗いたら、これは一体何の集まりか見当がつかないだろう。学生風あり、会社員風あり、公務員風あり、リタイア風あり、主婦風あり、年齢、性別も一定していない。ある時期には十代から八十代の人に参加していたこともあった。部屋に入りきらなくなり、椅子を借りてきて三重の矩形をつくって歌会をしたこともある。キリスト教の尼さんが部屋を間違えたまましばらく座っていたこともあるが、あれは何の会合と間違ったのだろう。いま思い出しても不思議な気がする。またある時は、『源氏物語』を翻訳しているロシアの女性に参加したこともあった。

歌会のいちばんの面白さは、何ととっても歌の読み方の面白さにある。十首の歌は十通りの読み方があるといわれるように、歌の読みには初めから正解などは無い。作者が意図したように全員が読む、ということはまず無い

と言っている。自分が作ったのとは全く異なる。読むと驚いたり、腹をたてたりする。いちばん嬉しいのは、自分の歌が自分自身でも気がつかなかったものを読みとつてもらえたときである。そういう時、歌が生身の自分を超えて先を行っていることを感じる。そして、それを気づかせてくれた評者、よき仲間を持った仕合わせをしみじみと思う。

京大会館では、「塔」の月例歌会のほかにも歌会をした。「塔」と「未来」の若手が岡井隆を中心に十数人集まってやった歌会で、のちに「荒神橋歌会」と名付けられた。会館の近くを流れる鴨川に架かる橋の名に因んでの命名である。この歌会は一八九三(平成五)年にスタートし、六十回続いたことをキリとして九九(同十二)年に終わった。この歌会では題詠の試みなど様々な趣向が考えられ、高度な読みの展開をまのあたりにすることができた。

歌会で作った歌の何首かは歌集におさめたが、その中の、

やはらかな縫ひ目見ゆると思ふまでこ
の人の無言心地よきなり

一家

などを読み返していると、考え考えことばを選びながら好意的な批評をしてくださった黒木三千代さんの口調や表情が鮮やかによみがえってくる。

これら二つの歌会のために京大会館に通つたのは百回近いのではないだろうか。また歌会で会った人の延べ人数はどれくらいか見当もつかない。一度だけしか来なかった人、何回か来てなぜか来なくなった人、ずっと定着した人と様々である。

来ずなりし人の幾たり夜の海に灯り遠
ぞぎし船のごとしも 「歌壇」〇〇年三月号

歌会のあと、集まって下のレストランで食事をすることもあるが、緊張がほぐれて、これがまた楽しい。歌会では出なかった本音が出たり、うだうだと雑談しているうちに時間が過ぎていく。こういう場で歌を通した人と人の繋がりができていくのである。そういう繋がりは深く長く続く。幾組かのカップルも誕生した。

歌会の理想的なあり方としては、基層部を形成している常連の中に、毎回何人かの新しい参加者の顔が見えるのが望ましい。歌会は絶えず流動的であって、少人数に固定してしまわないのがいいし、初心者も居て、年齢も幅ひろいほうが活性化する。

歌会に行き始めたころは、無署名の歌に点数を入れることが刺激になったし、励みにもなったけれども、このやり方を長く続けると、歌会用のうまい歌の作り方が身につきすぎるという弊に気がついた。

短歌は技巧だけではだめなのである。身構えず平明なことばを使って豊かな歌を作っていくことも大事なのだということを、二つの歌会に出ることによって、おのずからわたしは納得するようになった。